

□ 作曲

石塚潤一

2017年の11月17日は、オーケストラ・プロジェクト、西澤健一の新作オペラ「[記]」、日本現代音楽協会の作曲コンクール：現音新人賞の本選会など、少なくとも8つの現代音楽に関するイベントが都内に集中した。近年、特に首都圏において小規模かつ質の高い演奏会場が整備され、デジタル技術の発展で作曲家／演奏者自らが宣伝素材をデザイン出来るようになるなど、演奏会開催の「参入障壁」が下がった結果がここに現れている。

例年ご紹介している、主に首都圏の現代音楽関係イベントについての情報を集積する「現代音楽イベントカレンダー」に登録されたイベント数は、昨年一年間で402。驚くべき数の公演が（一部に演奏の関わらない講演や勉強会が混じっているとはいえ）開催されていることが見て取れる。中堅世代を中心とした日本の現代音楽創作の充実が、こうした玉石混濁の小・中規模公演の中にあり、いわゆる「メジャーな場」がこれを抱ききれていない現状は昨年と変わっていない。

ただ、昨年は大規模な公演においても目覚ましい成果が—邦人新作とは関わらないものの—幾つかあった。ベルギーのダンスカンパニー：ローザスの来日公演、なかでも『ヴォルテックス・テンボラム』（5月5日～7日）は大きな成果。フランススペクトル楽派の重鎮：グリゼーの同名曲を、演奏のアンサンブル・イクトゥスはほぼ暗譜で演奏し、時にダンサーとともにステージを動き回る。途方もない修練の賜物。東京オペラシティ、コンポージアムにおけるハインツ・ホリガー《スカルダネリ・ツイクルス》の日本初演（5月25日）も忘れがたい。不世出のオーボエ奏者として知られるホリガーは、作曲家・指揮者としても世界有数の存在であり、演奏時間2時間半に及ぶ代表作を自ら指揮した。ラトヴィア放送合唱団は、数々の特殊唱法、微分音程を駆使した楽曲で超絶的な演奏を披露し、日本のアンサンブル・ノマドも健闘。自作を精確にリアリゼーションするホリガーの手腕にも学ぶところが多かった。さらに、11月19日、23日、26日に、読売日本交響楽団の定期演奏会の一環として行われたメシアン唯一のオペラ《アッシジの聖フランチェスコ》日本初演も特筆すべき成果である。通常、オーケストラの定期公演では2～3日のリハーサルを経て本番を迎えるが、この公演は常任指揮者カンブルランの肝いりで、入念な準備を行った形跡がある。これら三公演を実現した熱量が邦人新作の初演に齎されるとしたら、楽曲の受容の在り方が確実に変わるであろうと思わせる、極めて水準の高いものであった。

ここからは、邦人新作の初演に関わる印象的な公演を日付順に挙げていく。まずは、ヴォクスマーナ36回定期（1月12日）。この団体の公演にアンコールピースを提供し続けてきた伊左治直の個展で、新作《アンコール》を初演。指揮の西川竜太は、本年も先鋭的な委嘱活動を継続し、指揮を務める5団体で、藤井健介、川上統、木下正道、権代敦彦、大胡恵、近藤謙、金井勇、渋谷由香、萩森英明、新美桂子、山本裕之、横島浩、篠田昌伸らの新作を初演。邦楽四重奏団concert vol.9（2月22日）。30歳前後の若手邦楽器奏者で結成され、「邦楽四人の会」のレパートリーを継承すると同時に、自身の委嘱活動も行う。本公演では、福井とも子への委嘱作を初演した。井上郷子ピアノリサイタル#26（3月5日）。昨年10月に70歳の誕生日を迎えた

近藤謙のピアノ作品個展。井上は、10月31日に開催された近藤謙の70歳を記念した公演にも出演した。近藤の作品を特徴づける「線の音楽」の方法論による器楽曲が両コンサートで系統的に紹介された上、この方法論に拠らない近作を収めた合唱作品CD（指揮：西川竜太）がリリースされ、作風の大きな転換が可視化された。低音デュオ第9回定期（3月10日）。パルトンの松平敬とチューバの橋本晋哉によるデュオ。年1回の定期で、2作ずつの委嘱作を演奏する。本年は、山本裕之と足立智美の新作を披露。前述のコンポージアム内で開催された武満徹作曲賞（5月28日）は、一人の審査委員が全責任をもって受賞者を決めるコンクール。審査員のホリガーは4人のファイナリストを残し、先鋭的音響を演奏可能な記譜へと落とし込んだ坂田直樹が、《組み合わされた風景》で単独一位。Music Tomorrow 2017（6月9日）は、NHK交響楽団が贈賞する尾高賞の受賞作品のお披露目と、委嘱新作初演の二本立て。尾高賞受賞作は、一柳慧《交響曲 第10番》と池辺晋一郎《シンフォニー X》の二作。委嘱新作として岸野末利加《シェイズ・オブ・オーカー》が演奏された。同月後半には、アルディッティ弦楽四重奏団が来日し、ツアーの中で西村朗の弦楽四重奏曲第6番を初演（6月18日）。松平頼暁 ギターのための音楽展（7月6日）は、ギタリストの山田岳が中心となり実施。松平のそれぞれに趣向を凝らしたギター作品が集められる中、エレキギターのための《オスティナティ》をステージ初演。松平頼暁については、「回転／散乱～松平頼暁をめぐって～」（11月24日）でも声楽曲を中心に作品が特集され、《ディスパージョン》が初演。アンサンブル・エクソフォニー・トウキョウ第3回演奏会（7月10日）では、篠原眞の《弦楽四重奏曲》を初演。市川侑乃は現代音楽家への委嘱を積極的に行う稀少なエレクトーン奏者として注目され、その第7回リサイタル（7月25日）では、木下正道、鈴木治行の新作を。第8回リサイタル（12月27日）でも川上統の新作を初演。サントリー・ホール改修の影響で9月にずれ込んだ、サントリー芸術財団のサマーフェスティバルは、芥川作曲賞本選演奏会、片山杜秀をゲスト・プロデューサーに迎えた4公演、ゲオルグ・フリードリッヒ・ハースを招いた国際委嘱シリーズが2公演。芥川作曲賞は、中村ありす、向井航、茂木宏文が賞を競い、茂木が受賞。坂東祐大への委嘱曲《花火》を初演（9月2日）。片山公演は選者ならではの懐古趣味が前面に出、戦前・戦中の作品が中心に。大澤壽人がアメリカ修行中に作曲した昭和9年の習作《コントラバス協奏曲》を世界初演（9月3日）。山澤慧無伴奏チェロリサイタル（9月12日）は全曲初演の意欲的な試みで、小栗舞花、川上統、福井とも子、中川統雄、高橋裕、石川潤、福土則夫の作品を。會田瑞樹ヴィブラフォンソロリサイタル（10月26日）は、間宮芳生、山根明季子、稲森安太己、清水一徹の新作が初演。初演魔である會田は昨年、33歳の初演に関わった。『作曲家の個展II』（10月30日）は、一柳慧、湯浅謙二の二人展。湯浅が一時的に体調を崩したため、予告していた新作《軌跡》は完成されず、冒頭6頁のみの試演に。代わりに演奏された《クロノプラスチックII》の演奏が出色。一柳慧《二重協奏曲》も初演された。12月6日は、渡辺俊哉の個展。中堅世代を牽引する作曲家の意外にも初めての個展で、その透かし織りの美意識が独自様式へと結実していることが示された。

2017年は日本統治下の朝鮮半島で生を受けた尹伊桑の生誕百年であり、大阪、東京、武生で力のこもった作品演奏が行われたことも忘れがたい。また、『音楽と建築』の改訂、『形式化された音楽』の邦訳が出版されるなど、クセナキスの再評価が準備された年としても記憶されよう。

7月25日には、合唱作品を中心に活躍した作曲家：小林秀雄が逝去。海外からはピエール・アンリの訃報（7月5日）も届いた。